

児童家庭支援センターによるヤングケアラー支援の実施および検証事業総括：栃木 ちゅうりっぷ

昨年度に引き続き 2023 年度、児童家庭支援センターちゅうりっぷ（以下、「当センター」）は標記、検証事業の中で、ケースの報告を行う機会をいただいた。ヤングケアラー支援を行う上での視点、方向性、今後の在り方など多くの示唆に富むご指摘をいただき感謝を申し上げたい。

〔支援の概要〕

提出したケースは母子家庭で施設入所歴（主訴はネグレクト）があり、施設退所後、児家センや近隣の居場所の利用を継続していた。児童相談所からの指導委託から当センターの支援が開始され、3 年が経った中での検証だった。母は娘である中学生女子（以下、「本児」）を友だちのように一体化して話し相手としているが、一方で本児は母に本音を話せず、経済的な理由もあり、自分の生理用品を買うことすら母に言えなかった。

当センターは支援開始当初、虐待（ネグレクト）を再発させないという視点が強かった。過去に行政との関係不調があったため、必要であれば週 1 回の家庭訪問や 20 時までならと母からの電話を取り、学校への不満があれば、冷蔵庫を移動したいからと呼び出しにも応えた。本児から朝練と称して、ジョギングやコンビニまでの買い物にも付き合った。支援者との関係性が築けた支援開始 2 年目に週 1 回の弁当配達が始まり、高校受験生であった本児と近隣の居場所で学習支援を行った。食材、配達にかかる活動費、参考書・問題集、居場所で毎回注文する本児の好きなクリームメロンソーダを購入させていただいた。

〔子ども支援、母支援について〕

検証作業の中で、ケースを虐待防止ではなく、ヤングケアラーの視点としてみる必要があるという指摘があった。本ケースはネグレクトが主訴であり、当センターが支援を開始したとき、まずは関係性を築くことに腐心した。ただ、ヤングケアラーの視点というのは、一例として、子どもが子どもらしさを取り戻すことや子どもが将来の進路を描けるかということだった。虐待リスクを軽減するため衛生面、対人関係で不足するところを補う点のみならず、子どもが本来もつ可能性や力を相対的な貧困とならず、環境を整えられるかということであった。支援者が目標として子どもに言わせたい視点でなく、子どもまたは家族から見える視点を承認することでもあり、子どもや家族が支援者から離れて身近な人と横に広がっていける環境を作れるかだったように思う。

子どもが子どもらしさを取り戻すというのは、支援者にとってまず関係性を作るということだった。その意味で支援当初の方針は間違っていなかったのかもしれない。幸い、母子は当センターが行う訪問を毎週受け入れ、母の職場での悩みや本児の学校担任と上手くコミュニケーションが取れない心配事を包み隠さず話した。本児も推シタレントのグッズを指さしながら関連の話をしてくれた。継続した訪問の中で毎回、家庭環境や母の職場の話、学校担任とのやり取りも時間の経過とともに推移していく。ある日の訪問で散らかっていたリビングが、次の訪問の際にはビンと缶が部屋の隅にまとめられていた。またある日は、夜 6 時、学校担任からの電話に出なかった母が、文句を言いながら電話に出てみたなど母の変化に気づくことが多かった。母の頑張りを支援者は自分事のように喜び、母のありのままを認めた。本児に対しても女性職員と推シタレントの魅力を聞きつつ、母に言えない苦労や学校にいても話す友だちがなく居づらい状況を聴いていた。本児の今の姿を認めていく作業を一つ一つ丁寧に繰り返し

た。今やりたいこと、興味を持つものへの関心が前面に出る中で、支援者から受験や母との関係、高校入学後のイメージを聴いていった。しかし話に出てくるものは漠然としていて、学習も宿題をやる程度で、先の見通しを語ることは少なかった。

〔地域の社会資源につなぐ支援について〕

検証作業でヤングケアラーは経済的貧困と一人親世帯という家庭の背景に持つことがあるという指摘があった。経済的貧困は所有物の選択肢を限定してしまうことが起こりやすく、一人親世帯は子どもが親の役割を引き受けてしまいやすいということだった。今回、支援3年目で新たに、週1回の弁当配達と近隣にできた居場所で本児だけの受験勉強会を毎週、行うことにした。母は子どもにはお総菜だけでなく、手作りの料理も振る舞ったが、週1回の弁当は母の食事作り、片付けの手間を解放した。休みなく働く母がのんびりできる時間を作り出した。

近隣の居場所とは、民間タクシー会社が高齢、障害、児童を問わない地域の居場所をカフェ併設で開設した。母子の自宅から歩けるところであり、この居場所は母子の味方になった。真新しい建物へ下校が早い水曜日に、本児は自宅にカバンを置いて居場所へ直行した。母の休みに重なれば、母子は車で居場所に駆けつけた。居場所スタッフ（タクシー会社社員）から話しかけられ、はにかみながら控えめに応える。居場所に通う近隣の知的障害を持つ女性とダーツをやり、高校入学式後はネクタイの締め方を近所の高齢男性から教わった。本児が学校から帰ったとき、自宅の鍵を持ち合わせてなくて、本児は当センターに来ないで居場所で母が帰ってくるまで時間を過ごすこともあった。検証作業では地域でヤングケアラーを受け入れるところの敷居の低さが大切になるといわれていた。まさに居場所とは居て心地よい環境、交流、元気の源となる場であった。

〔今後の課題〕

検証作業で、本ケースの家族歴、生育歴の質問があった。一人親が父性的な役割、母性的な役割を上手に使いながら子育てをすることは簡単でない。物事の善悪や社会的な規範、秩序などを教えていくことと、子どものすべてを受け入れて苦しみを取り除く豊かな優しさを一人の親だけで行うことは容易ではない。働くこととケアすることを、一人の親が時間の限られた中で適切に行うことは困難と言えるだろう。自己責任と片付けないで、地域社会が共に生きていく知恵を考え出すならどうしたらいいのだろうか。

ヤングケアラーが担いがちな家事労働（掃除、洗濯など）を支援者が代替することでは解決に至らないという指摘があった。始めに述べた「子どもが子どもらしくいられる」ために、子どもが何でも話せるような安心できる関係性を作ることは重要であろう。掃除や洗濯などの家事ヘルパーの仕事は家に入っていくきっかけになる。遊びや学習、弁当も子どもに関わる手段になる。子ども、家族に関わる選択肢として、地域になれば、地域資源を開発する理由にもなるだろう。そうしたサービスはないよりあった方がいい。ただ、いろいろな引き出しがあってもその子ども、家族に何が必要か、必要な手段、サービスをどのタイミングで、どう活用するか時間的な見通しを持ったアセスメントや支援方針、支援計画は関係者間で話し合う必要があるだろう。本ケースの場合、先の見通しは甘く、今つながってる支援者が今後もつながっていてほしいと考える。ただ、本児が高校入学となった現在、遠距離となった登下校やアルバイトを行う本児は当センター、居場所ともに利用しなくなっている。

今回の検証事業で当センターがヤングケアラー支援に関して一番に感じたことは、子どもが今、どんな気持ちでいるかにどう寄りそえるかである。もちろん保護者も家族まるごと考えていくが、肝心の子どもを一番真ん中に据えて考えていくことが基本だと改めて教わった。